

「表現」をすることということ その1 ～作ることから表現することへ～

Considerations Regarding "Expression" Part 1 From completing work to expressing

椎名 澄子 ・ 佐藤 貴虎
Sumiko SHIINA ・ Takatora SATO

旭川大学短期大学部幼児教育学科

Abstract

In this paper, the questionnaire survey of kindergarten teachers in I district regarding the artistic expression is examined and the analysis of the free description in this questionnaire are done. In conclusion, it can be understood that the emphasis on completing the work rather than expressing is laid in the current kindergartens. This paper concludes with suggestions to improve the practical situation to kindergarten teachers.

要旨

本論文では、造形表現についての各園での取り組みについてI管内の幼稚園教諭への質問紙調査を行い、自由記述に関する回答と幼児教育に関する3法令と照らし合わせ分析を試みた。結論として、表現することより作品を完成させることに重きを置いている現状が保育現場にあることが把握でき、そのことが造形表現活動を円滑に進めることが難しくなっていることが理解できた。保育者養成において、「表現」そのものの意味を学生に伝えていくことの重要性が浮かび上がってきた。

1. はじめに

本論文の筆者はそれぞれ造形表現、教育学を担当している。日々保育者養成に携わるにあたり「そもそも表現するとはどういうことなのだろうか?」、時折そのような議論を交わすことがあった。広辞苑によれば表現とは「心理的、感情的、精神的などの内面的なものを、外面的、感性的形象として客観化すること。また、その客観的形象としての、表情・身振り・言語・記号・造形物など。」と定義されているが、「表現」とは大変多義性のある言葉であり、共通言語として機能しにくい側面もある。そして、そのことが学生たちの「表現」の理解を曖昧なものとしてしまっている。

実際のところ、高等学校にて美術を選択し本

学に進学してくる学生は毎年10%以下であり、その理由を聞くと大抵は中学校の美術の時間に嫌悪感を覚えた、と回答する学生が多い。自分の内面を表象するものとしての表現の1つとして美術があるにも関わらず、それを嫌いとする学生がほとんどなのだ。確かに美術に限らず、実習指導等において自分の想いや意見を言葉にして「表現」ということにも苦手意識を覚える学生が増えている実感もある。しかしながら、将来「表現」を含む五領域を中心とし、遊びを通しての総合的な指導に携わる保育者が、表現に関して嫌悪感を覚えているようであれば、子ども達の学びに偏りが出てしまう可能性も出てくる。

そこで本研究では、保育者が表現をどのよう

なものとして捉えているのかを把握することで、今後の造形表現、実習指導等の演習において「表現」に対して前向きに取り組んでいくようになっていくための手がかりとしていきたいと考えている。

2. 幼児教育で求められている表現とは

平成30年に改訂された幼児教育における3法令（文部科学省、厚生労働省、内閣府）において「表現」はどのように扱われているのだろうか。まず、今回の改訂により、0歳から18歳までの連続した成長発達を保障すべく3本柱とも言える「育成すべき資質・能力」が設定されている。まずは、遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができようになるのかという「知識・技能の基礎」、遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするかという「思考力・判断力・表現力等の基礎」、心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むかという「学びに向かう力・人間性等」の3つである。このなかでは特に「感じる」「気づく」「わかる」「考える」「試す」「工夫する」という子どもの姿を大切にしていくことが求められる。しかしながら、環境を通しての教育の視点、遊びを通しての総合的な指導という幼児教育の特徴は何も変わってはいない。

では、それらは保育現場で具体的にどう実践されていくのかと言えば、それらは主に五領域に書かれているが、乳児保育に関わるねらいや内容においても、「身近なものに関わり感性が育つ」において、「身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。」となっており、こどもがコミュニケーションの当事者として成長発達していくことができるよう応答的対応の重要性が述べられている。これが1、2歳児になると五領域に準じるものとして「感性と表現に関する領域「表現」:感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現

する力を養い、創造性を豊かにする。」と定められている。これは、こどもが自分の感情や気持ちに気づく大切な時期であることを示している。そのためにも内面が動くような、心を動かされる体験というものが大切になってくる。様々なことにワクワクしたり驚いたり、喜んだりする体験をどこまで遊びのなかに取り入れていけるのか、あるいは環境を設定できるのかが大切になる。自分のものとして自分の力でやってみたいと思うことから試行錯誤が生まれ思いを巡らすことにつながっていく。また、幼稚園教育要領においても五領域の「表現」のみならず「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」の中に「豊かな感性と表現」が設けられており、心を動かす出来事などに触れ、感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる、と定められている。この中のキーワードとしては、「心を動かす」「感性を働かせる」「特徴や表現の仕方」「自分で表現」「友達同士で表現」「過程を楽しむ」「表現する喜び」があげられる。心理学者ピアジェは「児童期の子どもの活動は、科学の第一線で未知の分野の探求、開発をしている科学者と同じである」という言葉を残している。一言で言いかえれば動くこと＝ものを考えるということだ。大人は頭の中だけで考えがちだが、こどもにとってはそれは困難で、こどもの「考える」場面は、子どものやりたいことや願いがあることによって「工夫する」という動きによって現れる。どう工夫すればいいか、ということで立ち止まり、そこで試行錯誤することによってまた次の活動が生まれ出されていく。この「過程」をどのように保育者がみてとるのかということが、保育現場ではより求められていく。

このように、保育の現場のなかで、「表現」の領域は子どもの育ちを幅広い側面から支える重要な意味を持っており、保育者を養成する我々教員もその意味を適切に学生たちに伝えていく使命がある。

「表現」をするということ その1
～作ることから表現することへ～

3. 幼稚園教諭の現場の声から

今回の調査にあたり令和元年12月に開催された北海道I管内対象の幼稚園教諭免許更新講習参加者に質問紙調査（巻末参照）の協力をお願いし、98名の方から回答を得た。今回は主に自由記述の回答から幾つかにコメントをまとめあげ、「表現すること」について考えてみたい。（なお以下○の数字が幼稚園教諭のコメント、（）の数字がそれに対する我々の考えとなる）。

①「新卒の先生は、研究室でも表現活動（造形）に力を入れて勉強してきた人が多いが、自分の理想を少々押し付けてしまい、子どもの発達段階と見合っていない傾向が強い人がいて、子どもが興味を持てず独りよがりになってしまうのが勿体ない。アドバイスはするのだが、「こう習った」「こういう素材を使った」等、頭でっかちになっていることもあり、気持ち・意欲は理解できるが、もっと子どもを観察するか寄り添う気持ち、柔軟な心で造形表現活動を組み立てて欲しいです。」

(1)子どもの造形表現活動において保育者に求められることは、1. 表現そのものを理解していること、2. 子どもを理解していること、と言える。特に1については、先に述べたように、「表現」の持つ多義性が新卒の先生方に幼児教育においてあるべき表現のあり方の迷いを生じさせ、余裕の無さから学んだことに固執し守りに入っていることもある。そして、幼児教育の特徴の1つである間接教育の原理の中で展開される「表現」ではなく、小学校以降の直接教育の原理の中で展開される「表現」のみを養成課程で学んできている幼児教育者がいることも一因として考えられる。いずれにせよ、保育者のアプローチの仕方を見ると、道具や材料などの物的環境や言葉かけなどの人的環境が重要となる。物的環境は1. 表現そのものを理解していることが条件となり、人的環境は2. 子どもを理解していることが前提となる。様々な具体的な活動案を持っていたとしても、表

現の根本的な意味合いが理解できずに子どもを無視した独りよがりな活動では、すぐにどう「表現」として対応してよいかわからなくなり、造形表現活動そのものが保育者にとって苦痛な時間となるだろう。常に活動の主体は子どもであり、保育者の肯定的な言葉かけと適切な環境（材料・道具・空間・時間）設定は、子どもの表現行為の強い動機となるだろう。そして保育者は子どもたちの気持ちに共感し、子どもたちの表現を無条件に受け入れることが造形表現活動では求められる（堂本、p.42）。大人の表現にはテクニックが必要となることも多く技能のスキルアップも楽しさの一つとなり得るが、子どもの表現はLIVE（行為・行動）である。子どもの造形表現活動は、子どもと保育者が表現者となり空間を共有し、共感しあいながらつくり上げていく時間ではないかと考える。（樋口・西垣、p.29）

②同学年の子の中でも、理解の差が大きい事。他学年の作品との兼ね合い。作品として残すため、保護者の目に触れるための完成度が求められる。また、子どものイメージするものを聞いて子どもには難しく、結局、教師が作っている…ということになることが良いのか悪いのか。

(2)造形表現活動の最後に表れたものは、表現行為の軌跡としてとらえると、活動の時間の中で子どもたちの迷いや工夫や気付きなどの成長が画面に走る絵の具によって見えてくるだろう。子どもたちにとって造形表現活動の時間がもっと楽しく、時間や空間を活用しながら自由に思いのままに自他とのコミュニケーションを図っていく「あそび」の時間であると感じてもらえるように、成果にとらわれることなく、行為・行動としての表現に重点を置くことが肝要である（花・岡田、p.25）。科目担当者の想いとして、今一度「作品として残るもの」が造形表現活動では無いことを理解してほしいと考える。そして保護者や他の保育者の

目を気にしなくてはならない環境での表現活動は、そもそも誰が主体となっているのか分からなくなっている。これは保育現場における行事のあり方などを含め造形表現に限らず言えることではないか。

また、ハサミなどの道具の活用の上達は、活動を行う上で安心安全の保障という部分では不可欠かもしれないが、大人も子どもも同様に技術習得の意欲は表現意欲と比例することが多い。ちぎる・破るといった行為では表現できないと感じ、ハサミ特有の切り口を知り、真っ直ぐ切りたい綺麗な曲線に切りたいと感じたときは「ハサミを使いこなしたい」という思いが出てくるだろう。道具に興味関心を持つきっかけをつくり、その意欲に火を付けるのは、日頃から子どもの理解に尽力している保育者だけにできることなのではないか。しかしながら技術の習得にばかり目を向けては造形表現活動の時間は鍛錬の時間になってしまうため、ハサミを使わずとも真っ直ぐに切れるように、ゆっくり少しずつ丁寧に指でちぎり進めていくのも「表現」を楽しむ一つの技法である。

磯部（辻 2014、p.12-13）が述べているように、自由にモノと関わりモノと対話する中で感じるままに表現することが造形表現活動である。しかしここで言うモノの捉え方を間違えると、モノを作る（造形物を作る）ことが目的となってしまう。心や身体が感じたことを子ども自身が表現したいと思い、「つくる」行為へと繋がっていく。そしてまたその行為を通して子どもは自分とのコミュニケーションを図ることができると考えられる。

- ③発達につまずきのある子どもと一緒に造形表現活動をする際の伝え方、手伝い方、気持ちの乗せ方にはいつも試行錯誤しているが、逆にやりがいがだったりもする。素直に表現してくれるところ、こちらも嬉しくなる。

(3)理解と技能の差を悩みに抱えている保育者

は多いが、「表現」の求めているものを理解していれば、作品の完成を活動のゴールと捉えることもなく、足並みを揃える必要がないことは理解できよう。その子らしさ（こだわり）が表れているか、試行錯誤がなされているかが重要であり、「表現すること」そのものにおいて全く問題は無い。「表現」はコミュニケーションの一つである。「表現」は子どもの発達段階を知る手掛かりになることは言うまでもないが、発達段階を絶対的な基準として「表現」そのものを操作し、保育者が手を加えることは本末転倒と言える（花・岡田 2014、p.17）。

例えば現代美術作家によるワークショップでは、太鼓の音の強弱やリズムを感じながら、ブラジル人の子どもたちが画材を使って自由に表現を楽しむ活動が行われていた。このようなワークショップの特徴としては、はじめから興味・関心を持って「やってみよう」という意欲のある子どもたちが参加していることが多い。しかし実際の保育現場では「やりたくない」「どうしたらよいかわからない」という子どもも多くいるだろう。しかしながらそれでも「人間の根源である」という表現の意義は変わることは無い（樋口・西垣 2018、p.28）。表現そのものをコミュニケーションツールであると考えたとき、空間を共有し、少しでも共感できる時間がそこにあれば、間接的ではあるがそれもまたコミュニケーションの一つであると言える。

4. おわりに

上記のように、自由にモノと関わりモノと対話する中で感じるままに表現することが造形表現活動である。しかしここで言うモノの捉え方を間違えると、モノを作る（造形物を作る）ことが目的となってしまう。心や身体が感じたことを子ども自身が表現したいと思い、「つくる」行為へと繋がっていく。そしてまたその行為を通して子どもは自分とのコミュニケーションを図ることができるのだ（辻・磯部 2014、p.13）。

「表現」をするということ その1
～作ることから表現することへ～

そのため、ものづくりだけが「表現」ではないということを確認しておきたい。行為そのものが表現になり得たり、最終的に保存できない空間そのものが作品になったり、その限られた時間でのみ形が存在するものも造形表現活動と言える。活動の終わりの振り返りに必ずしも「作品」と言われる物体（証拠）がなくてもいい。活動のゴールに大きく影響するのは「時間」でもいい。子どもたちだけでなく保育者自身も楽しかった、またやりたい、と思うことができ、その振り返りの時間にもまた思いを共感し合える活動こそが、自由にわがままにこだわりをやり通した造形表現活動といえるだろう。こうした活動を保育現場で実践することなしに、「幼児期の終わりまでに育てて欲しい10の姿」の「表現」において求められている「感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲」が湧いてくることはなからう。

そして我々保育者養成に携わるものは、造形表現の際にただひらすら作り完成させることに意識を持つのではなく、「表現」するとは本来どういうことを意味するのか、を常に意識しながら活動に取り組むことの大切さを常に学生達に伝えていくことが求められる。

参考文献

- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説〈平成30年3月〉』
辻泰秀（2014）『幼児造形の研究』萌文書林
堂本真実子（2018）『保育内容領域表現 日々わくわくを生きる子どもの表現』わかば社内閣府・厚生労働省・文部科学省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説〈平成30年3月〉』
花篤寛・岡田愨吾（2014）『造形表現』三晃書房
樋口一成（2018）『造形表現の基礎』萌文書林
文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説〈平成30年3月〉』

参考資料「表現に関する質問紙調査用紙」

造形表現活動に関するアンケート調査

対象：保育現場で就労経験のある方

1、現在、もしくは以前（直近）の所属先を教えてください。（保育者として勤務）

・ 保育園（所） ・ 幼稚園 ・ こども園 ・ その他（ ）

2、現在、もしくは以前（直近）、何歳児クラスを担当していましたか。（縦割り等の場合複数回答可）

・ 0歳～2歳 ・ 3歳 ・ 4歳 ・ 5歳 ・ その他（ ）

3、月に何回くらいの造形活動を行っていますか。

・ 1回以下 ・ 1回 ・ 2回 ・ 3回 ・ 4回 ・ 5回以上

4、設問3. で1回以上を選択した方のみ回答してください。1回の活動時間は平均どのくらいですか。

・30分 ・45分 ・60分 ・90分 ・その他(分)

5、設問3. で1回以下(毎月は行わない)と回答した方へお聞きします。1回の活動時間は平均どのくらいですか。

・30分 ・45分 ・60分 ・90分 ・その他(分)

6、作品として形に残らない「体験型」の造形表現活動を取り入れていますか。
(例:どろんこ遊び、ボディーペンティング)

・はい ・いいえ ・わからない

7、設問6. で「はい」と答えた方のみにお聞きします。それはどのような内容のものですか。

8、造形表現活動を行うにあたり、素材検証などの研究時間は確保できていますか。

・充分できている ・できている ・どちらかといえばできている
・あまりできていない ・わからない

9、造形表現活動の際、主に使用している素材は何ですか。(例:お菓子の空箱、木片、画用紙、毛糸)

10、造形表現活動の題材等を考える際に重視している点は何ですか。

「表現」をするということ その1
～作ることから表現することへ～

11、あなたは、造形活動の時間を楽しんでいますか。

- ・ はい ・ いいえ ・ わからない

12、あなたは、ものづくりや表現することが好きですか。

- ・ 好き ・ どちらかといえば好き ・ どちらかといえば苦手 ・ 苦手

13、設問 12. で「苦手」「どちらかといえば苦手」と回答した方のみにお聞きします。いつ頃から苦手意識を持っていますか。

- ・ 年少ころ ・ 年中ころ ・ 年長ころ ・ 小学校低学年ころ ・ 小学校高学年ころ
・ 中学生ころ ・ 高校ころ ・ 養成校ころ ・ その他 (頃から)

14、設問 12. で「苦手」「どちらかといえば苦手」と回答した方のみにお聞きします。その理由は、どういったものですか。

15、設問 12. で「好き」「どちらかといえば好き」と回答した方のみにお聞きします。いつ頃から楽しいと感じましたか。

- ・ 年少ころ ・ 年中ころ ・ 年長ころ ・ 小学校低学年ころ ・ 小学校高学年ころ
・ 中学生ころ ・ 高校ころ ・ 養成校ころ ・ その他 (頃から)

16、設問 12. で「好き」「どちらかといえば好き」と回答した方のみにお聞きします。その理由は、どういったものですか。

17、子どもたちの造形表現活動を組立てたり、実際に行うにあたって、何か困っていることがあればお聞かせください。

椎名 澄子 佐藤 貴虎